モラエスの庭

―（２）「随想」の変質 ―

宮崎隆義，佐藤征弥，境泉洋

徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部
〒770-8502　徳島市南常三島町1-1
E-mail: miyazaki@ias.tokushima-u.ac.jp

Moraes's Garden

― (2) Change in the Quality of 'Essay' ―

Takayoshi Miyazaki, Masaya Satoh, Motohiro Sakai

Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima
1-1 Minami Josanjima-cho, Tokushima, 770-8502, Japan
E-mail: miyazaki@ias.tokushima-u.ac.jp

Abstract

This paper is an essay on Moraes's *Tokushima no Bon-odori*, part of the outcomes of the Project Studies by the activities in 2011 of Moraes's Studies Group launched in July 31, 2010. The members of Moraes's Studies Group, T. Miyazaki (English Literature), M. Satoh (Plant Physiology), M. Sakai (Clinical Psychology), all at the Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima, have been continuing to try to analyze Moraes's works and to approach a new facet of Moraes's biographical aspects. Moraes was fascinated by the far-east Japan, and fell in love with Oyoné, who died soon after the marriage. After her death Moraes decided to live in Tokushima, which was Oyoné's hometown. He lived with Koharu, Oyoné's niece, for a while until she died from tuberculosis at the age of 23. His life until his death in Tokushima was a kind of hermit, disregard of his fame as Consul General and Navy high-rank Officer of Portugal, and other financial merits entailed with them.

Moraes published *Tokushima no Bon-odori* in 1913 after Oyoné died. This work might be regarded as based on the forms of diary and essay, seemingly as reports from Tokushima to Bento Carqueja, editor of *Porto Commercial Newspaper* in Portugal. His interest in Kino Tsurayuki's *Tosa-Nikki* (*Tosa Diary*), which was written in the persona of a woman, seems to be the key to understand the modification in the quality of *Tokushima no Bon-odori*. Though this work was written as a diary and an essay in the persona of alien people to Tokushima, the tone of this work was quite changed at the final part of his letters to Bento Carqueja, the editor. This tentative paper intends to open a new perspective in a rather fixed image of Moraes and studies about him.

Key Words: Wenceslau de Moraes, *Tokushima no Bon-odori*, Forms of Diary and Essay, Moraes's Studies

１.はじめに

本研究は，徳島大学総合科学部学部長裁量経費・平成 23（2011）年度総合科学部創生研究プロジェクトによる研究成果の一部である。

研究プロジェクト名は「モラエスの庭―徳島の自然・人・心―」であり，研究参加者は，大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部の佐藤征弥（植物生理学），境泉洋（臨床心理学），宮崎隆義（英文学，代表者）の 3 人で，いずれも平成 21 年度，22 年度，23 年度の，徳島大学大学院総合科学教育部博士課程前期での共通科目「プロジェクト研究 I」の担当者であった。

本研究論文の目的は，プロジェクトの一環として開いている例会・読書会での成果をもとにして，モラエスの著作について新たな考察を加えることである。平成 22（2010）年度については，モラエス研究会設立とその後の活動の記録を記し，さらに，例会・読書会で扱った『徳島の盆踊り』に関しての論考を，「モラエスの庭 ―（1）日記文学・随筆文学ということ ―」(『地域科学研究』第 1 巻，2011 年）として公刊した。また，このプロジェクトと関連し，大学院の共通科目「プロジェクト研究 I」での成果の一部として，同じく『地域科学研究』第 1 巻に，「『阿波名所図絵』における眉山の自然と景観」(佐藤征弥ほか，pp.15-27)を掲載した。

モラエスは，日本の日記文学，随筆文学に傾倒しながら，「随想」として『徳島の盆踊り』をポルトガルの『ポルト商報』に連載発表した。しかしながら，この作品では，結末部において彼が最初に意図していた「随想」とはかなりトーンが変化していることがうかがわれる。その点について，モラエスが参考にした紀貫之の『土佐日記』に焦点を当てて考察してみたい。

２.『徳島の盆踊り』[1]
―「随想」の変質：日記文学『土佐日記』の捉え方―

ヴェンセスラウ・ジョゼ・デ・ソーサ・モラエス (Wenceslau José de Sousa Moraes, 1854-1929)[2]が，『徳島の盆踊り』を書き始めたのは，1913 年 12 月のことである。ポルトガルの新聞『ポルト商報』の編者ベント・カルケジャ(Bento Carqueja)の要請によりほぼ 1 年かけて執筆され，1914 年 3 月 5 日から 1915 年 10 月 3 日にかけ 68 回に分けて掲載されたが，執筆の前に，題名や全体の構成は充分に考えていたようである。

「モラエスの庭 ―（1）日記文学・随筆文学ということ ―」(『地域科学研究』第 1 巻，2011 年）でも論じたものであるが，モラエスは，『徳島の盆踊り』を連載するにあたり，なぜ「随想」にこだわるのかとして，日本の日記文学，随筆文学として，紀貫之の『土佐日記』，清少納言の『枕草子』，鴨長明の『方丈記』，吉田兼好の『徒然草』を挙げている。これらの作品は，モラエスが読んだと思われるフランス語訳，英語訳，ドイツ語訳によって当時ヨーロッパの知識人たちに知られていたことは想像できるが[3]，当時ポルトガルの『ポルト商報』の読者がどの程度理解していたかはいささか疑問ではある。モラエスが所蔵していた書籍は，神戸の総領事を辞任し，徳島に来住することを決めた時にすべてが処分されている。しかもそれが，不幸なことに，神戸空襲によって恐らく全て失われている。モラエスが，神戸から持ち込んできた蔵書等は，死後彼の遺言によって当時の光慶図書館に寄贈されたが，これもまた徳島大空襲によって焼失の憂き目にあっている。当時のフランス語訳や英語訳，ドイツ語訳と比較しながら，テキスト分析を行なってモラエスの理解度を検討してみることも興味深いところであるが，さほどの成果は得られないであろう。むしろ，モラエスが，それぞれの作品のどの部分に興味を抱いているかが重要であるように思われる。

ドナルド・キーンは，その著書『百代の過客―日記

[1] 『モラエスの日本随想記　徳島の盆踊り』（ことのは文庫，徳島：徳島県立文学書道館，2010 年 3 月）。以下，『徳島の盆踊り』とし，引用はすべてこの版に依るものとし，引用の後に括弧書きで示す。

[2] Moraes の綴りに関して，花野富蔵『日本人モラエス』（東京：大空社，1995 年, pp.12-15）によれば，1911 年以降ポルトガル政府は Moraes を Morais と改めさせたとあり，モラエス自身，両方を混用している。眉山山頂のモラエス館に展示されている海軍時代の論文と『日本におけるメンデス・ピント』では，Morais となっている。ちなみに，彼の死後出版された『モラエスの恋』は *Os Amores de Wenceslau de Morais* (Editorial Labor, 1937) となっている。また，ベルギー在住のモラエスの遠縁の子孫モライス教授も‘Morais’である。

[3] 「『土佐日記』,『枕草子』, その他のもっとも著名な随筆は，幸いなことにフランス語，英語，ドイツ語訳がある。何点かがここに今，私の仕事机の上にのっている。」，30。

に見る日本人（上・下）』[4]で，日記文学，随筆文学の系統を詳説している。日記を書くこと，あるいは随筆を書くということは，本質的には，時間を意識し，それを書き留めることとして日記文学の紹介を行っている。

> 日記を付けることは，言ってみれば時間を温存することである。歴史家にとってはなんの重要性もないような日々を，忘却の淵から救い上げることである。プルーストは，『失われた時を求めて』の終わりの方で，「時間から身を引いた存在のさまざまな断片」があったことを発見したという。だがこれと同じ発見を，平安時代の女性作家たちもしていたのである。
>
> 同時に彼女らは，作家がそれに永続性を与えたいと願っているさまざまな印象を興趣あるものにするには，プルースト自身の言葉を借りて言えば，「その中にそれらが宿っている媒体，すなわち作者自身の中において，それらを隈なく知悉するように努め，その深奥まで見透せるぐらい，それらを明らかにしてみようとする」しかないことも，知っていた。
>
> そしてこれこそ，初期日記作者から近代の「私小説」作家に至るまで，日本文学の中に一貫して流れる，一つの基本的性格に他ならないのである。
> (13-14)

ドナルド・キーンは，第２次世界大戦中，日本軍兵士の日記に興味を抱き，それが戦後の彼の日本文学への傾倒と選択となったと述べているが，彼も述べているように，本来の日記というものは他人に読まれることを前提にはしていない。それは，忘れぬための個人の覚え書きであり，内面の記録である。ドナルド・キーンは，日本独特の私小説の原点を日記文学とみなして，日記文学の系譜を詳説しているが，その中で，紀貫之の『土佐日記』を紹介している。その点で，前述したように，モラエスの取り上げた『土佐日記』と，ドナルド・キーンが取り上げた『土佐日記』を比較し，ふたりの異邦人がどのような興味を抱き捉えているかを検討して見ることは興味深いであろう。

モラエスが生きた時代は，19 世紀の後半から 20 世紀の前半である。1859 年に，チャールズ・ダーウィン（Charles Darwin, 1809-1882）は，『種の起源』(*The Origin of Species*）を出版した。これが当時大きな反響を起こしたことはいうまでもないが，この作品が持つ意味は，時間というものについての意識をもたらしたということであろう。奇しくもその少し前の 1851 年にはロンドンで第１回の万国博覧会が開かれている。それ以降，世界の各地で博覧会が開かれることになるが，博覧会の意味は，物理的な時間の流れの中で過去・現在・未来を意識することに他ならない[5]。モラエスも，博覧会に関わっており[6]，その意味でもモラエスの生きた時代の意味は興味深いといえるだろう。

『徳島の盆踊り』が単行本として出版された時に，モラエスの最大の理解者であったベント・カルケジャは，その「序文ではない」にこう書いている。

> マクベスの夢！・・・闘いののち，精神は奇妙な幻想に圧倒されたように感じる。静かな，ほのぐらい森を通っているような気がする。その森で，炎につつまれた大木のそばに三人のいずれも不可解な女の姿を見かける。彼女たちが何者であるかを知ろうとすればするほど，彼女たちは飛ぶようなはやさで逃げ，「やがて王になられるお方！」と叫びながら，ある壮麗な宮殿に走り込む。
>
> 「ポルト商報」で「ぼんおどり」の最終部分を読んだ日以来，私たちの心の中にはひょっとしてヴェンセスラウ・デ・モラエスはマクベスの夢を見ているのではあるまいか，という印象が刻まれた。 (16)

『マクベス』の三人の魔女が，モラエスが愛した三人の女性，マリア・イザベル，おヨネとコハルに幾分か重ねられていることは想像できる。おヨネの墓を求めてやってきた徳島を「何よりもまず，神々の町，仏たちの町，死者の町である」(66）とみなしたモラエスにとって，徳島の地は，死者たちの霊が「盆踊り」の時期に生者のもとに帰ってくるという，追慕（サウダーデ）の地に他ならなかったであろう。マクベスの夢に例えた，ベント・カルケジャのモラエスの心情理解

[4] 朝日選書 259，260，朝日新聞社，1987 年。

[5] 吉田光邦『万国博覧会　科学文明史的に』（東京：NHK ブックス 106，昭和 45 年），第２章参照。

[6] モラエスは，1903 年３月１日～７月 31 日の第５回内国勧業博覧会でのポルトガル物産の展示に奔走した。

は深いものであって,『徳島の盆踊り』の本質を見抜いているといってもよい。老いを迎えている現在に生きながら，過去を振り返り，己の死を未来に見据えたモラエスの，その「マクベスの夢」を，われわれ読者も彼の文章を通して夢見ることになる。

モラエスは,『ポルト商報』に書き送った原稿について, 彼が倣った日記文学に模して年月日を付している。その日付に沿って眺めてみると，例えば，1914 年 3 月 5 日と付された文章は，この作品の表題についての説明となっている。

> ところで，長いあいだ住んでいた神戸で，私は徳島の人たちからその驚歎すべき「ぼん・おどり」のすばらしさについてよく聞かされていた。そのはなしがたびたびくり返され，人々が踊りながら街路に現れ出てくるときに口ずさむメロディーを日本のギターである「しゃみせん」が私の耳元でたびたび奏でたので, 六,七年ほど前, 徳島の「ぼん・おどり」を自分の目で見たいと思い，二，三日出かけることに決めて，その時期に行ってみた。しかしながらほんとうにがっかりしてしまった。時間の浪費であった。その時季は天候が変わりやすいのだ。その頃は，よく東シナ海から恐るべき台風が発生し，ときには日本の沿岸に到達し，勢いはすでに衰えてはいるものの，まだ充分に荒々しく，重大な被害をもたらす。
>
> だが，旅行のことを話そう。すでに神戸から四国への小さな定期船に乗っているときに，風が激しく吹きはじめ，空が曇り，海が荒れ出した。
>
> 徳島ではすさまじい暴風雨。物凄い突風，どしゃぶりの雨，町は浸水し，人命が失われ，尽大な被害が出た。多数にのぼる被害のひとつが富田橋の完全な崩壊で，これは，やっと最近になって再建された。無論，その年，徳島では「ぼん・おどり」は催されなかった。(23-24)

ここには，富田橋が台風で完全に崩壊したとの記述が見られるが，この大きな出来事は，明治 40(1907)年 9 月 10 日付けの「徳島毎日新聞」に報じられている 9 月 8 日のものである。当時，台風の被害は甚大なもので，河川は氾濫して近年にない大出水となり，富田橋ばかりでなく，他の橋も落ちたり落ちかかったりしたようである。

ここで問題にしたいのは，海軍軍人で領事も努め記録に正確であったというモラエスの，この部分の記述が正確なものであるかどうかという事ではない。むしろ，「六,七年ほど前」と，時間的に曖昧にされている点である。さらには,「徳島の人たち」とあるが，モラエスの生涯のことを知っている後の時代のわれわれ読者にとっては，この人たちが，おヨネとコハルであろうことは容易に察しがつく。わざわざ個人的な関係を隠蔽して「徳島の人たち」としている点についても，彼のこの作品執筆にあたっての意図が反映されていると考えてよかろう。

具体的な例をさらに挙げれば, おヨネの死について，あるいは自分の子供と思われる子供の死について，モラエスはまるで他人事のように距離を置いて述べている。

> ほんのちょっと前―二年もまだ経っていない―八月のある午後，ある人が私の手を握りしめて，あることを熱心に求めた。かわいそうな人で，母親や兄弟姉妹，身内が多数いるのだが，誰ひとりそばにおらず，率直に言うと，彼女のことなどほとんどかまってくれない。彼女は，どんなにむずかしそうなことであっても，自分の願いを心からかなえようとしてくれる唯一の人は私であるということをよく知っていて，私に求めたのだ，自分の生命を永らえさせてほしいと。・・・・・・
>
> そして，私は彼女の願いをかなえてやらなかった。そうする力が私にはなかった。彼女はあきらめの言葉をつぶやき，最後の力をふりしぼって私の手を握りしめ（今でもその感覚が残っているかだって？・・・・・・），死んでいった。・・・・・・(192-93)

> 数ヶ月前，近所のある家で，生後二十時間で死んだ男の子の遺体を見たことがある。蝋のように青ざめた遺体は，火葬場に行くばかりになっていた。白い蒲団にくるまれた小さな棺の中には，買い求めたばかりの人形と，ふたつの蜜柑が入れられてあった。かくも早くに行われることになった長い旅路への，それが唯一の荷物であった。・・・・・・(198)

おヨネは，1912 年 8 月 20 日に 38 歳で亡くなってい

る。結婚式を挙げ，事実上結婚生活を送っていた妻としてのおヨネを，「ある人」と述べて現実を韜晦している点については，神戸の総領事であったモラエスの社会的な体面との捉え方もあるが，同時に『ポルト商報』という新聞の不特定の読者を意識しての体面でもあったと考えてよかろう。数ヶ月前に死んだ男の子についても，おヨネの姪で，作品中に「私に仕える女中」(128) として記述されているコハルとのいきさつがあり，彼の子供であったとの説もあるが，仮に彼の子供であったとしてもモラエスは決して自分の感情に流されることなく，まるで他人であるかのように淡々と述べているのである。当時，外国人が極めて珍しい徳島で，20 数時間で亡くなった子供の亡骸を外国人であるモラエスに見せるということは場合にもよるだろうがやや考えにくいので，その点でも様々な憶測が働きやすい。だが，事実はともかくも，ここで注目したいのは，上掲のふたつの部分に見られる彼が置いている距離である。その点については，モラエスが最初に取り上げた『土佐日記』が鍵になろう。

紀貫之の『土佐日記』について，ドナルド・キーンは，紀貫之が娘の死を潜在的な統一の主題としていると読み解いている。男である紀貫之は，周知の通り，女としてのペルソナを帯びて日記を書いているのである。

> 男もすなる日記というものを女もしてみむとてするなり[7]。

紀貫之は，日記という体裁で，男が漢文で書く日記を，女文字のかな書きで綴るとしている。ドナルド・キーンも指摘しているように，文体にも主題にも格別女性的なところはないにもかかわらず，紀貫之は書き手が女であることを徹底して貫き通している。さらに，日記らしく日付が施されてはいるが，土佐から都に帰って書かれたものであることははっきりとしている。

なぜ紀貫之が『土佐日記』を書いたのかという問題について，ドナルド・キーンは，紀貫之が「自分の人生の一時期に起こった出来事を記録するために書いたのだ」として，それは，作者の日々に起こった出来事の記述にとどまらず「一つの旅」を書いているのだと捉えている。その上，ドナルド・キーンも指摘しているように，この作品は，旅の日記，紀行文でありながら決して良い出来ではなく，旅のことは実はあまり多く語られていないのである。

モラエスが紀貫之の『土佐日記』を最初に置いているのも，ドナルド・キーンの捉え方を参考にすれば，その理由がある程度うなずける。モラエスの人生の一時期に起こった出来事—おヨネの死—を記録すべく，おヨネの死をひとつの統一した主題として書いていると見てよいであろう。若くして亡くなったおヨネの死は，老いを迎えた自分の死にも重なってくる。死と向き合いながら，おヨネのことを書き留め，同時に自分の内面を書き残すということをモラエスは行なっているといってもよい。それとともに，先に示したように，彼の子供への思いとも考えられる記述から，暗に，モラエスとあまり変わらぬ年齢で娘を失った紀貫之に自分自身の姿を重ねていたと考えられる。

> また，たとえば死んだ愛娘を思い出す条りなど，しばしば悲痛である。(31)

モラエスも紀貫之と同じくいわば官吏の立場であったのであり，世間に対する体面というものがある。紀貫之が，『土佐日記』において一貫して女であることを演じながら，娘の死を主題として書き留めたように，モラエスは，異邦人の傍観者を演じて失った者たちへの思いを書き留めているのである。

『徳島の盆踊り』は，日本の随筆文学から始まり，自分が「随想」を書く理由を述べて，徳島の様子を細々とモラエスの目を通して描き出している。死を巡る日本の文化を随想しながら自分に迫り来る死を見つめ，最後にはベント・カルケジャへの手紙で「盆踊り」に触れている。「盆踊り」から始まり「盆踊り」に終わるという，円環的な構成は，もちろんあらかじめ構想していたものに他あるまい。異邦人として，徳島や徳島の風物，習慣，そして，極めて個人的な身辺について，紀貫之が男でありながら女として貫き通して書いたように，あくまで異邦人の旅人として描こうとしている。

しかしながら，1915 年 10 月 1 日，10 月 3 日として添えられているベント・カルケジャへ宛てた手紙は，手紙という形式ゆえに極めて個人的な印象を与えるものとなっている。

1 年を巡り，再び「盆踊り」の時期となって，モラ

[7]『土佐日記　貫之集』(新潮日本古典集成)，東京：新潮社，1988 年，11。

エスは，当時の社会情勢で「ぼん・おどり」が禁止されたことを憂い，次のように述べている。

> 今年，徳島県庁は「ぼん・おどり」を禁止し，行事を宗教行事，つまり「ぼん・まつり」だけに限ることにしました。禁止の理由ははっきりしません。数ヶ月前の皇太后の崩御に対する国民的服喪のためとする人もいれば，また，遠くではあるけれども日本も巻き込まれているヨーロッパでの戦争のせいにする人もいます。しかし，ついでに言わせてもらえれば，日本の官憲は現在，文明の進歩と相容れないと彼らが考える旧習，昔からの民族行事のにおいのするものをさまざまなやり方でことごとく消滅させようとしています。その意図はほめたものではないと思います。（307）

モラエスの憂いはさらに，個人のレベルに至り，彼は「盆踊り」を迎えながらも，彼のもとに死者たちが戻ってきてくれなかったことを嘆きとして吐露している。

> もうおそい，私は「ぼん・おどり」に背を向けて，心が沈み悲しくなって家に帰ります。・・・・・・彼ら，これらの日本人はみな，自分たちの死者たちと霊的に接触してまだ間がなく，心たのしく幸せにあふれ，くつろぎ，踊っています。明日は，気持ちをとりなおしていつもの暮らしに戻るでしょう。私はちがいます。私は私の死者たちと接触しませんでしたし，誰も彼らについて何も私には話してくれませんでしたし，祭りに意識的に参加することはできませんでした。・・・・・・
>
> それでも，我が友よ，私は，ここで彼ら，私の死者たちと親しい関係になれるのではないかという期待を，口には出さないままでも心に深く秘めて徳島に来たのです。・・・・・・
>
> ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
>
> ところが，抱いていた期待とはうらはらに，私は死者に一度も会ったことがなく，その声を一度も聞いたことがなく，死者を一度も感じたことがありません！・・・・・・
>
> 私たちの死者たち！私の死者たち！・・・・・・このうんざりした打ち明けばなしが，多少明らかにしているように，私は死者たちのことを絶えず考えます。けれども正直言って，死者たちのことが理解できないのです。わからないのです。（313-15）

カルケジャに宛てたこの手紙が，1915 年 10 月 1 日と 3 日であることから，「私の死者たち」（meus mortos）と複数の形で表された者たちが[8]，いったい誰をさしているのかについて考えれば，おヨネと他の人物であろうと推測はできる。諸説あるモラエスの子供，あるいは若き日の激しい恋の相手，人妻のマリア・イザベル，姉のエミリアなど，さまざまに想像は働く。しかしながら，紀貫之が『土佐日記』で徹底して女のペルソナを帯びていたのとは対照的に，モラエスは，異邦人としてのペルソナをここで剥ぎ取り捨て去って，私人としてのモラエスに至っている。日本の随筆文学に傾倒し「随想」を書き始めたモラエスは，ペルソナの「日記文学」から「私」を露出させた，まさに「私小説」の域に達しているといってもよいだろう。

３．おわりに

モラエスは，それまで友人や妹に宛てた私信においても私的な内面生活を明らかにすることは一切なかったというが[9]，『徳島の盆踊り』で，初めて，名前は明らかにはしないまでも，おヨネのことを示したといわれている。「随想」いう形で，一定の距離を保ち，現実を曖昧にして，おヨネの死という出来事，あるいはおヨネを含め他の者「たち」の死という出来事を書き留めるべく，モラエスは「随想記」と副題に添えながらも実は「日記」として個人の内面を，「一つの旅」として書き留めている。充分に構想された円環的な構成は，図らずも最後のカルケジャに宛てた手紙によって，「私」が披瀝されるに及んでいる。「私の死者たち」と会えないというモラエスの心情が吐露されるに至った，こうした「随想記」の変質ぶりは，次の『おヨネとコハル』に直接的に示されることになる。それはまた，「随想」という形を取りながらも極めて「私小説」的な世界となっているのである。

---

[8] *O "Bon-odori" em Tokushima (Caderno de Impresses Initimas)* (PORTO: LIVRARIA　MAGALHÃES & MONIZ, 1916), 343.

[9] 『徳島の盆踊り』岡村多希子氏の「訳者まえがき」，6。

参考文献

ヴェンセスラウ・デ・モラエス，岡村多希子訳『徳島の盆踊り』ことのは文庫，徳島：徳島県立文学書道館，2010 年.

――――，『おヨネとコハル』東京：彩流社，1989 年.

岡村多希子.『モラエスの旅―ポルトガル文人外交官』東京：彩流社，2000 年.

紀貫之. 『土佐日記　貫之集』（新潮日本古典集成）東京：新潮社，1988 年.

キーン，ドナルド. 『百代の過客―日記に見る日本人（上・下）』（朝日選書 259，260）東京：朝日新聞社，1987 年.

鈴木登美. 『語られた自己―日本近代の私小説言説』東京：岩波書店，2000 年.

徳島県立図書館. 『モラエス案内（増補再販）』徳島：徳島県立図書館，平成 7 年.

徳島県立文学書道館. 『モラエス生誕 150 年・ハーン没後 100 年　モラエスとハーン展　東洋に魅せられた二人の西洋人』徳島：徳島県立文学書道館，平成 16 年.

花野富蔵.『日本人モラエス』東京：大空社，1995 年.

吉田光邦.『万国博覧会　科学文明史的に』東京：青土社，1995 年.

Moraes, Wenceslau José de Sousa. *O "Bon-odori" em Tokushima (Caderno de Impresses Initimas).* PORTO:LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ, 1916.